

ワーズワースの詩的空間 ―「解任された兵士」における少年と 元兵士の出会いの場―

大石 瑤子

はじめに

ウィリアム・ワーズワースの『序曲』(*The Prelude*, 1805) 第4巻の「解任された兵士」(“The Discharged Soldier”)には、少年時代のワーズワースと戦争から帰還した兵士の出会いが描かれる。¹ 彼と元兵士の出会いの場は、湖水地方のホークスヘッド(Hawkshead)から3マイル離れたファー・ソーリー(Far Sawrey)の標石のある地点と考えられている(Brennan 264)。「カンバーランドの老いた乞食」(“The Old Cumberland Beggar, a Description,” 1798)、「廃屋」(“The Ruined Cottage,” 1798)、「決意と自立」(“Resolution and Independence,” 1802)といった作品にみられるように、1790年代後半から1800年代はじめにかけてのワーズワースは、経済的に困窮する人物を題材とした作品を多く書いた。彼が貧困者に特別な関心を向けた理由は、デヴィッド・シンプソン(David Simpson)が指摘するように、彼らの観察を通じて共同体のうちの共感(sympathy)を描き出すことにあったと考えられる(33)。

確かに、マシュー・C・ブレナン(Matthew C. Brennan)やリチャード・グラヴィル(Richard Gravil)が主張するように、「解任された兵士」にも、少年の兵士に対する深い共感が描かれる。² しかし、『序曲』執筆の6年前に書かれた初稿では、少年の元兵士への共感よりも、彼と元兵士の出会いの場面の詳細を描くことに、ワーズワースは力を注いでいる。元兵士のおどろおどろしい姿の描写や、元兵士に向かって吠えたてるマスチフ犬(mastiff)によって、彼はこの場所の恐ろしい雰囲気演出する。少年と元兵士の出会いの場の恐ろしい雰囲気を彼が強調したのは、少年にとってごくありふれ

た道が、馴染みのない存在の出現によって非日常へ一変する様子を演出するためだったと考えられる。『序曲』へと組み込まれる過程で、少年の他者への共感という詩の主題が強調されるあまりに、少年と兵士の出会いの場面に描かれる日常から非日常への急転は、相対的に印象が薄くなってしまった。だが、少年と兵士の出会いを詳細に描いた初稿には、ワーズワース独特の詩的空間が描かれている。

本稿の目的は、「解任された兵士」の初稿に描かれる少年と元兵士の出会いの場を考察し、この場所に隠された、少年の生活領域の内と外を分ける境界を明らかにすることにある。この詩の初稿は1798年の1月下旬から3月にかけて、ワーズワースが妹のドロシー・ワーズワース（Dorothy Wordsworth）と共に暮らしていた、サマセット州オールフォックスデン（Alfoxden）で執筆された（*Lyrical Ballads*, 277）。『序曲』において、少年と元兵士の出会いの場は、ワーズワースが少年時代を過ごした湖水地方のホークスヘッドとされている。しかし、彼らの出会いの場の描写には、オールフォックスデンでの夜の散策の体験が色濃く反映されている（Woof 2）。ワーズワースは、夜の散歩の過程で自らが体感した、私的領域の内から外への横断の感覚に着想を得て、少年と元兵士の出会いの場を創り上げたと考えられる。第1節では、オールフォックスデンで執筆された初稿において、少年と元兵士の出会いの場がどのように描かれているかを読み解く。なお、便宜上、本稿ではオールフォックスデンで書かれた初稿をオールフォックスデン版、1805年版『序曲』に組み込まれた詩行を『序曲』版と呼び、論を進める。第2節では、ワーズワース兄妹のこの地における散策の道程をたどり、ワーズワース自身の生活圏の内と外を分かつ境界が、この詩にいかん反映されているかを指摘する。それらを踏まえ、第3節では少年と元兵士の出会いの場の詩的意義を論じる。

第1節 オールフォックスデン版「解任された兵士」における兵士の描写

「解任された兵士」には三つの版がある。一つ目は、オールフォックスデンで執筆された初稿である。完成後、ワーズワースはこの原稿に手を加え 1805 年版『序曲』のエピソード群の一つに組み込み、さらに 1850 年版『序曲』においていくつかの詩行を書き換えている。

オールフォックスデン版の元兵士の描写と、『序曲』版における「解任された兵士」の描写には違いが見られる。ホークスヘッドの村から続く道を歩きながら、少年は夜の散策を楽しんでいた。だが、「急な曲がり角」(37) にさしかかったところで、彼は突如「異様な姿」(38) の兵士に遭遇する。以下はオールフォックスデン版からの引用である。

He was in stature tall,
A foot above man's common measure tall,
And lank, and upright. There was in his form
A meagre stiffness. You might almost think
That his bones wounded him. His legs were long,
So long and shapeless that I looked at them
Forgetful of the body they sustained.
His arms were long and lean; his hands were bare;
His visage, wasted though it seem'd, was large
In feature, his cheeks sunken, and his mouth
Shewed ghastly in the moonlight; from behind
A mile-stone propped him, and his figure seem'd
Half-sitting, and half-standing. I could mark
That he was clad in military garb,
Though faded yet entire. (41-55) ³

「痩せて硬直した」姿、「体重を支えていることを忘れてしまう」くらいに「非常に長く不格好な」脚、「こけた頬」、月明かりの下で「亡霊のような口」というように、この一節には元兵士の悲惨で物悲しい様態が描かれる。その後も元兵士の悲惨な様子が、「すべての親

しいものから／切り離され、半ば自らの本性からも／切り離され」(57-59)、「心地よくない考えか、あるいは痛み」(69-70)にうなされるかのように、硬直したまま絶え間なくぶつぶつとつぶやいていくと続く。

『序曲』のエピソードに組み込まれる過程で、元兵士の描写は一部が削除され、悲惨さが和らげられた。特に、44行から50行にかけての元兵士を具体的に描写した箇所では、「体重を支えていることを忘れてしまう」くらいに「非常に長く不格好な」脚や、「亡霊のような口」や「半ば自らの本性からも／切り離された」姿といったおどろおどろしい描写が削られ、「こんなに痩せた男は外でもなかでもこれまで見たことがない」という当たり障りのない表現だけが残された。少年は元兵士を物陰から眺めることに居心地の悪さを感じた。彼は元兵士に話しかけ、彼を親切な村の住人の家へ連れてゆく。オールフォックスデン版は二人が家のドアの前で別れたところで締めくくられるが、『序曲』には元兵士と別れた後の少年の様子が付け足される。以下の引用は『序曲』で加筆された詩行である。

Back I cast a look,
And lingered near the door a little space,
Then sought with quiet heart my distance home.

(*The Prelude* 1805, IV 503-05)

扉の前にたたずむ少年の様子からは、彼が元兵士のことを心配していることが窺われる。「穏やかな気持ちで遠い家路へ向かう」様子は、熱帯の島の戦場から帰還し「生まれ故郷へ向かって旅をする」(*The Prelude* 1805, IV 449)という元兵士の言葉と呼応する。ジェームズ・H・エイヴリル (James H. Averill) は、少年の「穏やかな気持ち」に元兵士への彼の共感を読む(139)。彼は「カンバーランドの老人」を引き合いに出し、この詩には元兵士との出会いを通じて、少年の心に皆が共有する「一つの人の心」(146)が芽生える様子が描かれていると主張する。

「解任された兵士」のオールフォックスデン版原稿と『序曲』版原稿を比較すると、両者の描く元兵士の描写に質的な違いがあることが分かる。オールフォックスデン版では、少年にとっての元兵士は外部からやってきた本能的な恐怖の対象として描かれる。一方、1805年版『序曲』版では、元兵士の「異様な姿」の描写が穏やかな表現に差し替えられた。あまりにも恐ろしく残酷な描写は強烈な印象を与えるために、読み手の注意を主題からそらしてしまう。『序曲』版で元兵士の描写のグロテスクさが抑えられたのは、この詩の最後にほのめかされる他者への共感という詩の主題をより引き立たせるためだろう。

だが、少年の目に元兵士の姿が「異様」なものに映ったのは、彼の姿のせいだけではない。ワーズワースが兵士を「異様」と形容した文脈に注意を向けてみたい。少年は夜道を独り歩いていた。「急な曲がり角」(37)を過ぎたところで、「異様な姿」が彼の目に入ってくる。この文脈からは、少年が兵士を「異様」と感じたのが彼の姿を詳細に観察する前であることが分かる。暗がりの中で姿を見たということは、彼が最初に目撃したものは元兵士の影であると考えるのが自然だろう。彼が兵士を「異様」であると感じたのは、帰還兵という、普通であれば農村にはいるはずのない場違いな存在がいることへの違和感に起因しているのだろう。少年にとって元兵士は、日常空間の外に在るべき存在なのだ。特に、『序曲』版で削除されたマスティフ犬の描写は、この元兵士が村の住人にとって外部者であることを読み手に印象付けるものだ。犬小屋をあてがわれ「鎖でつながれた」(80)この犬は、標石のそばでうわごとを言いながら立ち尽くす元兵士に「苛立って」(81)、「止むことなく吠え続ける」(82)。マスティフ犬とはイギリス原産の大型犬であり、番犬としてよく飼われていた。犬が「止むことなく」吠えたてるのは、犬が元兵士を外部からの侵入者と見なし警戒しているためと考えられる。

少年の目に元兵士の影が「異様な姿」に映った背後には、少年の中に生活圏の内と外、日常と非日常の区別があることを窺わせる。「急な曲がり角」やマスティフ犬の描写は、彼が無意識に感じ取ってい

る生活領域の内と外を視覚的に表現し、少年と元兵士の出会いが引き起こす日常から非日常への劇的な転換を演出する。だが、このような空間演出の手法の着想をワーズワースはどこから得たのだろうか。本稿では、この詩の初稿が執筆されたオールフォックスデンでのワーズワースの散策の体験に着目する。ドロシーの『オールフォックスデン日記』(*Alfoxden Journal*)には、兄妹の日々の散策の様子が詳細に記録されている。次節では、ドロシーの日記をたよりに、この作品の空間の描き方の着想の在り処を探る。

第2節 『オールフォックスデン日記』に記録されたワーズワース兄妹の足跡

ワーズワース兄妹が住んでいた頃のオールフォックスデンはどのような場所だったのだろうか。彼らが移住しておよそ一月後、ドロシーはメアリー・ハッチンソン (Mary Hutchinson) へ手紙を送っている。この手紙の中で、彼女はこの地域の風景と地理を詳細に伝えている。まず、オールフォックスデン・ハウスはワーズワース兄妹のような家族が12組は住むことができる家具付きの「大きな邸宅」(*Early Years* 190)⁴であった。邸宅の外には鹿のいる広大な庭 (Park) があり、建物の端に「野菜と果物を蓄えたすばらしい菜園」(190) が備えられていた。建物からは、緑豊かな牧場の先に海が見え、邸宅から海までは「2マイルに満たない」距離にあり、コールリッジのコテージがあるネザー・ストーウィまでは3マイルの距離にあった (190)。

オールフォックスデンの周囲の様子の中で特に注目したいのは、「豊かな森」(190) である。この森の周辺には、「解任された兵士」で描かれる、小川、公道、生垣といった要素がそろっている。ドロシーの『オールフォックスデン日記』を繙きつつ、この詩と「豊かな森」の関係を考えてみたい。まず、この森の中には邸宅から4分の1マイルの距離に小川があったと言う。1月27日の日記で、ドロシーは月の明るい晩に兄と散策に出かけ、犬が村に流れる川のせせ

らぎに向かって「奇妙で異様な声」(142)で吠え立てるのを聴いたと記録している。先述したマスチフ犬について、ワーズワースは「まるで／川のせせらぎ(“murmuring”)に向かって吠えているかのようだった」(132-33)と表現している。ドロシーの記録は、先述のマスチフ犬を連想させる。

次に、公道と生垣について検討したい。この森は、ホルフォードへ至る公道に接していたと考えられる。1月31日の日記には、「解任された兵士」の冒頭に描かれる少年が歩いた道を彷彿とさせる記述が見受けられる。

Set forward to Stowey at half-past five. A violent storm in the wood; sheltered under the hollies. When we left home the moon immensely large, the sky scattered over with clouds. These soon closed in, contracting the dimensions of the moon without concealing her. ... Left the wood when nothing remained of the storm but the driving wind, and a few scattering drops of rain. ... The hawthorn hedges black and pointed, glittering with millions of diamond drops; the hollies shining with border patches of light. The road to the village of Holford glittered like another stream. (143)⁵

「解任された兵士」の冒頭部分には、少年が雨上がりと思しき「表面の濡れた」(7)夜道を歩いている様子が描かれる。その道は「月明かりに照らされて」(8)、「音もなく流れ／谷を流れせせらぎを立てる川に／合流するもう一つの小川」(9-10)のように見えたという。少年が歩く道の様子は、ドロシーの日記の「ホルフォードへ向かう道は、もう一つの川のように輝いていた」という記録と重なる。また、月明かりで光り輝く「何百万ものダイヤの雫」を葉先に滴らせるサンザシの生垣の記述も、少年が身を隠したサンザシの生垣を連想させる。冒頭の詩行は、1月31日の夜の散歩で見たものを基にして書かれたと考えられる。

これらの森の周辺の様子を踏まえると、ワーズワースがどのよう

な道程を頭に浮かべながら、少年の歩む道のりを描いたかがよくわかる。ドロシーの日記からは、邸宅を出た兄妹が「豊かな森」で嵐をしのぎ、その後、サンザシの生垣を通り抜けてホルフォードへ向かう公道に出たことが読み取れる。この記録を踏まえるならば、少年は、森を流れるせせらぎの音を聞きながら雨に濡れた夜道を歩き、生垣を通り過ぎて公道の曲がり角に差し掛かり、そこで元兵士と遭遇したことになる。そして、少年が元兵士と遭遇した場所のモデルとなった地点は、森と村へ続く道の境界であったことが考えられる。次節で詳しく論じるが、「解任された兵士」の冒頭では、夜の散歩が少年を孤独にするがゆえに、世の喧騒から彼の精神を守ることが語られる。

ここで興味深いのは、オールフォックスデンの「豊かな森」もまた、ワーズワース兄妹にとって私的な空間であったことだ。1月31日の夜の散歩で、急な嵐に出くわした兄妹は、森に「避難した」(“sheltered”)と記録しているが、この森は雨風から身を守る場所として彼らに利用されていたようだ。例えば、1月22日の日記で、彼女はホルフォードへ行く途中で森を抜ける時、赤い実をつけたヒイラギの木を「暖かな避難所」(141)としたと記録している。また、同月の31日にも、強風の中コールリッジのいるストーウィに向かった折、暴風に見舞われ、やはり森の中の「ヒイラギの木の下に避難した」(143)という。2月1日には、ヒイラギの木の言及はないものの、強風の中で大きな木の下「暖かな避難所」に兄弟で身を寄せたことが記される(143)。ヒイラギの木が作り出す、私的で親密な空間は、ワーズワースの「丘からつむじ風がやってきて」(“A Whirl-Blast from behind the hill,” 1800)と題された詩にも反映されている。

A whirl-blast from behind the hill

Rush'd o'er the wood with startling sound:

Then all at once the air was still

And showers of hail-stones patter'd round.

Where leafless Oaks tower'd high above,
I sate within an undergrove
Of tallest hollies, tall and green,
A fairer bower was never seen.
From year to year the spacious floor
With wither'd leaves is cover'd o'er,
You could not lay a hair between:
And all the year the bower green. (1-12)

ドロシーの日記によると、3月18日「寒くて風の強い朝」(149)に兄妹はコールリッジをストーウィの家まで送った。その帰り、電が降り、二人はヒイラギの木の下へ「避難」する。この時、枯葉が電にあたり踊っているように見えたという。ドロシーの記録した「暖かな避難所」と同様に、詩に描かれるヒイラギもまた、広々とした木陰を作り暴風から語り手を守っている。木の下枯葉に覆われた地面もまた、この場所の温かみを伝える。語り手がこの場所を、美しい「休息の場所」(“bower”)と呼ぶ表現は、ドロシーがこのヒイラギの木立を繰り返し「暖かな避難所」と呼んでいたことと響き合う。“bower”は私室を意味する“bur”に由来する言葉で、伝統的なパストラル(Pastoral)において親しい者たちが語らう場所として描かれてきた。ゆえに、この言葉は身を隠し親密な関係を築くための私的な空間を連想させる。この詩において、ヒイラギの木陰は、いわば、戸外の「隠れ家」と捉えられている。

「解任された兵士」における生活領域の内と外を視覚的に表現する手法は、ワーズワース自身のオールフォックスデンの散策体験から着想を得たものだと考えられる。オールフォックスデンの「豊かな森」は、ワーズワース兄妹にとって私的で守られた空間であった。この森が生垣を挟んでホルフォードへ続く公道へつながっていたことを踏まえると、森と公道の間には私的な領域の内と外を隔てる心理的な境界があったことが分かる。「解任された兵士」において、少年は生垣を抜けてすぐの地点で元兵士と遭遇する。つまり、少年と

元兵士が出会った地点には、ワーズワース自身の生活圏の内と外を分かつ境界が反映されていると考えられる。『序曲』第6巻において、彼がシンプロン峠（Simplon Pass）を越えた時、彼の内面で想像力が「湧き上がり」（*The Prelude* 1805, VI 525）、現実から主権を「奪い取った」（533）ように、私的領域の内と外の境界を越えた時、彼は急に呼び起こされた元兵士との出会いの記憶に心奪われたのではないか。だが、少年と元兵士の出会いの場所をそのような心理的境界の上に重ね合わせるのにはどのような意図があったのか。最終節では、境界上における少年と元兵士の出会いの意義を考察したい。

第3節 少年と兵士の出会いの場にほめかされる境界

「解任された兵士」の冒頭には、夜の道を歩く少年の様子が描かれる。オールフォックスデンの森の私的空間がワーズワースに心の安らぎを与えると同時に彼の想像力を刺激したように、夜道の闇と静けさは少年の精神を回復させ、心の働きを活発にする。夜道を歩くことは「より深い静けさ」（4）を与えてくれると少年は言う。そして、この「静けさ」は次第に少年の視覚を鈍らせ、彼を瞑想へと導く。

I steal along that silent road,
My body from the stillness drinking in
A restoration like the calm of sleep
But sweeter far. Above, before, behind,
Around me, all was peace and solitude,
I looked nor round, nor did the solitude
Speak to my eye; but it was heard and felt. (21-27)

あたりを取り巻く「穏やかさと孤独」によって少年の肉体は「眠りのようでいて／それよりずっと美しい」安らぎを得る。「穏やかさと孤独」が「上に、前に、後ろに」ワーズワースを取り巻くという表現は、「家から少し離れてところで書いた詩行」（“Lines Written at

a Small Distance from my House,” 1798）にある「祝福された力」が「あたりに、下に、上にと／巡る」という表現を彷彿とさせる（33）。いずれの詩においても、歩く者の精神を回復させる目に見えぬ力は、循環するものとして描かれている。ここで注目したいのは、夜の公道を歩く少年が穏やかであると同時に孤独であるということだ。この夜の歩行の美しい光景を共有するものは誰もいない。少年にとって、この夜の公道は自分だけの空間なのだ。そして、この私的空間の中にいることで、少年の心には美しい夢のような光景が浮かび上がる。

Oh, happy state! What beauteous pictures now
Rose in harmonious imagery—they rose
As from some distant region of my soul
And came along like dreams. (28-31)

心に浮かぶ「美しい幻想」に対し、ワーズワースは「私の精神のはるか彼方の領域」から湧き出てきたと語る。夜の道が作り出す私的空間によって、彼は自らの精神の内側を覗いていると考えられる。

このように、「解任された兵士」の冒頭には、夜道が作り出す私的空間に導かれ、自らの精神の内に浮かぶ「美しい幻想」を眺める少年の様子が窺われる。少年と夜道の関係は、ワーズワースとオールフォックスデンの森との関係に類似していると言えるだろう。少年にとって、この道は精神的「避難所」となる私的空間なのだ。しかし、元兵士という侵入者がこの道に現れたことにより、この道は少年を守る内向きの空間から、公に開かれた外向きの空間へ一変する。先述したように、元兵士は少年の目にこの世の者とは思えぬ部外者として映った。だが、ワーズワースは元兵士そのものだけではなく、元兵士のいる場所の描写によっても少年が守られた空間の外にいないことをほのめかしている。

While thus I wandered, step by step led on,

It chanced a sudden turning of the road
Presented to my view an uncouth shape
So near, that stepping back into the shade
Of a thick hawthorn, I could mark him well,
Myself unseen. (35-40)

元兵士と少年が遭遇するのは「急な曲がり道」である。道を歩いていると、このような場所で視界が大きく変わり、それまで見えていなかったものが見えることがよくある。さらに、このような視覚的な転機となる場所はしばしば生活上の領域を区分する目印になる場合がある。この元兵士に遭遇した時の少年の行動にも注目したい。驚いた少年はとっさに「後ずさり」してサンザシの生垣に身を隠す。彼は自分に親しみのある領域へ退却して身を守ろうとしているのだ。

元兵士と少年との出会いの場面の描写において、ワーズワースは元兵士が日常と非日常の領域の境界上に立つ人物であることをほめめかす。異様な姿と立つ場所によって、元兵士は自らが少年の生活圏の内に属さない存在であることを主張する。元兵士と少年の出会いに描かれているのは、自らの住む世界と全く異なる世界の存在との少年の突然の遭遇である。元兵士は日々の生活の領域とその外の境界に立つことによって、少年に甘美な守られた空間とは世界の全体ではなく、その外に世界が広がっていることを自らの存在によって教えている。そして、少年がまもなくして外の世界へ旅立つことを予兆している。この詩が書かれてから半年後、ワーズワース兄妹はオールフォックスデンの地を離れ、ワイ河の徒歩旅行に赴いた後にドイツへと渡る。オールフォックスデン版のこの詩は、ヒイラギのある「豊かな森」を離れて新たな土地へ旅立つワーズワース兄妹の未来を予期するものであった。

おわりに

本論では「解任された兵士」の少年と元兵士の出会いの場に隠された、少年の生活領域の内と外を分ける境界を明らかにした。この

詩の冒頭のホークスヘッドの村から続く公道は、少年が独り静かに自然と交流し安らぎを手に入れる空間として描かれる。オールフォックスデン版において、ワーズワースは少年の守られた空間の内と外の境界を、マスチフ犬、生垣、標石の描写によって読み手にほのめかす。そして、境界をほのめかす事物を用いながら、元兵士を守られた空間の際に立つ部外者として描くことで、少年と元兵士の出会いの場の緊張を演出する。このような空間演出の仕方は、ワーズワースがオールフォックスデンでの夜の散歩の経験に着想を得たものであったと考えられる。ドロシーの日記を手掛かりに、ワーズワース兄妹とこの詩のモデルとなった「豊かな森」の周辺関係を調べると、この森がワーズワースにとって安らぎを得るための私的空間であったことが浮かび上がった。彼は、散歩の際に森から公道へ移動する時に体感した私的領域の内から外への横断の感覚に着想を得て、元兵士がたたずむ境界的地点を作り上げたと考えられる。元兵士は少年の生活圏の内と外の境界に立つことによって、少年に外に広がる世界があることを知らしめる存在である。この詩に描かれた少年と元兵士の出会いは、少年が孤立した守られた空間の外へと旅立ち、他者へと目を向けるようになることを予期している。

引用文献

Averill, James H. *Wordsworth and the Poetry of Human Suffering*. Cornell UP, 1980.

Brennan, Matthew C. "Wordsworth's Characters." *Oxford Handbook of William Wordsworth*. Edited by Richard Gravil and Daniel Robinson, Oxford UP, 2015, pp. 254-64.

Gravil, Richard. *Wordsworth's Bardic Vocation, 1787-1842*. Palgrave Macmillan, 2003.

Simpson, David. "Wordsworth and the Poor: The Poetry of Survival." *Study in Romanticism*, vol. 23, no.1, spring, 1984, pp.31-59.

Thompson, Thomas W. *Wordsworth's Hawkshead*. Edited by Robert

- Woof, Oxford UP, 1790.
- McCracken, David. *Wordsworth and the Lake District: A Guide to the Poems and Their Places*. Oxford UP, 1984.
- Wordsworth, Dorothy. *The Grasmere and Alfoxden Journals*. Edited by Pamela Woof, Oxford UP, 2002.
- Wordsworth, William and Dorothy Wordsworth. *The Letters of William and Dorothy Wordsworth: The Early Years*. Edited by Ernest De Selincourt and Chester L. Shaver, Clarendon P, 1967.
- Wordsworth, William. *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797-1800*. Edited by James Albert Butler and Karen Green, Cornell UP, 1992.
- The Prelude, 1798-99*. Edited by Stephen Parrish, Cornell UP, 1977.

注

- 1 「解任された兵士」とホークスヘッドの関係については、下記の先行研究を参照。T. W. Thompson, ed., Robert Woof, *Wordsworth's Hawkshead* (Oxford UP, 1790) pp.132-33, pp.139-42. David McCracken, *Wordsworth and the Lake District: A Guide to the Poems and Their Places* (Oxford UP, 1984) p.225, p.227.
- 2 Brennan, p.254, Gravit, p.131 参照。
- 3 ワーズワースの詩の引用は、James Albert Butler and Karen Green, eds., *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797-1800* (Cornell UP, 1992) に拠り、括弧内に行数を示す。ただし、『序曲』に限り、Stephen Parrish, ed., *The Prelude, 1798-99*. (Cornell UP, 1977) から引用し、括弧内に行数を示す。
- 4 ワーズワース兄妹の手紙の引用は、Ernest de Selincourt, ed., Chester L. Shaver, rev., *The Letters of William and Dorothy Wordsworth: The Early Years, 1787-1805* (Clarendon P, 1967) に拠り、*Early Years* と略記する。
- 5 ドロシー・ワーズワースの日記の引用は、Pamela Woof, ed., *The*

Grasmere and Alfoxden Journals (Oxford UP, 2002) に拠り、括弧内に行数を示す。